マレーシアの英語

—発音・文法・語彙の特徴—

小野　礼子

はじめに

本稿では、Kachru（1992b, 1996）が提唱した英語の三つの圏、すなわち Inner Circle、Outer Circle、Expanding Circle のうち、Outer Circle に属するマレーシアの英語について考察する。まずマレーシアに英語が移植された時期及びマレーシアの言語政策について述べる。次にマレーシア英語の発音、文法、語彙の主な特徴について述べる。

1. マレーシアへの英語の移植

マレーシアは、マレー系（66％）、中華系（約 26％）、インド系（約 8％）、その他（1％）からなる人口 2,657 万人（2007 年統計局）の多言語多民族国家である（外務省, 2008）。マレーシアは、1957 年に英連邦内で独立してマラヤ連邦となったが、1963 年にシンガポール、ボルネオ島北部のサバとサラワクが加わりマレーシア連邦となった。その後 1965 年にシンガポールが分離独立し、現在のマレーシアとなった（外務省, 2008; 田嶋, 2002）。

マレー半島は 18 世紀後半にイギリスの植民地となり、英語はこのときにマレーシアに移植された（transplanted）（Kachru, 1986, 1992a）といえる。イギリスは 19 世期初め、現地のエリートを養成するために英語を教育媒体とする私立学校の設立を推進した。そして、まず、1816 年にペナン自由学校が設立された。その後、英語は現地のエリート層に浸透して

いき、1900 年には学生の 5 分の 1 が英語を教育媒体とする英語校に通うようになっていた（本名, 2006）。

2. マレーシアの言語政策

マレーシアは 1957 年、イギリスから独立したときにマレー語を国語に制定した。また、マレー語に加え、その後の 10 年間は英語も公用語とすることを憲法で定めた。これは、18 世紀後半から続いていた宗主国イギリスの言語的な影響を徐々に薄れさせ、政治、経済、文化、教育等の分野における言語を英語からマレー語に移行させるためにマレーシア政府がとった措置であった。1967 年の国語法でマレー語はマレーシア語（Bahasa Malaysia「マレーシアの言語」）と呼ばれるようになり[1)]、マレーシア語が唯一の公用語となった（本名, 2003; 本名・田嶋・榎木薗・河原, 2002）。

教育媒体も英語からマレーシア語への移行が進み、1976 年にはすべての英語小学校の教育媒体がマレーシア語に置き換えられ、1977 年には公立の中等学校において、さらに 1982 年にはすべての中等学校において教育媒体がマレーシア語になった。現在は小学校から大学に至るまで、ほとんどの学校でマレーシア語が教育媒体となっている（本名, 2003, 2006; 田嶋, 2002）。シンガポールでは独立以降、英語を重視する姿勢がどんどん強まり、現在では英語が教育媒体の第一言語になっているのに対し、マレーシアでは 1967 年以降、中等・高等教育において英語を教育媒体とすることが徐々に廃止されていった。このことから、マレーシアとシンガポールにおける英語の果たす役割がかなり異なっていることがわかる（石黒, 1992）。

このように、マレーシアは英語に関してシンガポールとはまったく異なった道を選んだが、それによってマレーシアの英語の使用が弱まったというわけではない。政府は 1970 年、英語を第二言語（the second most

important language in the country）と定め、学校での英語教育を義務づけている（本名, 2006）。憲法や公文書はマレーシア語で書かれ、政治もマレーシア語で執り行われているが、ビジネス、医学などの専門職の分野では英語の使用頻度のほうが高い（田嶋, 2002）。マレーシア政府は英語を実用的･実利的な言語､コミュニケーションの道具と位置づけている（本名, 2003）。

3. マレーシア英語

マレーシア英語はシンガポール英語と類似しているため､「シンガポール･マレーシア英語」（Singapore-Malaysian English）と呼んで同一変種とみなされる場合もあるが（石黒, 1992）、マレーシア英語のほうがマレー語の影響をより強く受けているといわれる（McArthur, 2003）。

シンガポール英語に関しては、これまで二つの社会言語学的アプローチが試みられており、その一つがシンガポール英語を三つの下位変種の連続体（lectal continuum）として捉える方法である（Platt and Weber, 1980）（Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004 参照）[2)]。これは、シンガポール英語には話者の教育レベルと社会・経済的背景に関連して、上層語（acrolect）、中層語（mesolect）、基層語（basilect）の三つの下位変種があり、教養のある人々によって話される最も威信の高い上層語から、教育をほとんど受けていないか、まったく受けていない人々が話す最も威信の低い下層語までが連続体をなして存在するという考え方である。

Baskaran（2004a）によると、マレーシア英語に関してもこの考え方が当てはまるという。Baskaran（2004a）は､マレーシア英語の上層語とは、語彙と発音における多少の違いを除けば標準イギリス英語と変わらない、国際的に通用する下位変種であり、これが標準マレーシア英語（standard Malaysian English）あるいは公式マレーシア英語（official Malaysian

English）であると述べている。また、中層語はマレーシア英語の特徴がよく表れた非公式な様式（style）のものであると述べ、これを「非公式マレーシア英語」（Unofficial Malaysian English）と呼んでいる。そして、マレーシアの人々は、たとえば上司や外国人と話すときには上層語である公式マレーシア英語を使用し、友人と話すときには中層語である非公式マレーシア英語に切り替えるといった使い分けをしているという。また、基層語は教養のないスピーチ様式の下位変種で、‘broken English’と呼ばれたり、マレーシアで「水準に達していない」という意味で使われる‘half-past six’をつけて‘half-past six English’と呼ばれたりしており、Baskaran（2004a）はこれを「ブロークン・マレーシア英語」（Broken Malaysian English）と呼んでいる。

ここでは、マレーシア英語の特徴がよく表れている中層語、すなわち、Baskaran（2004a）のいう「非公式マレーシア英語」を中心に、その発音・文法・語彙の特徴をみることにする。したがって、ここでいう「マレーシア英語」は、特記しない限り、「非公式マレーシア英語」を指すことに留意したい。

3.1. 発音

まず、マレーシア英語の発音上の主な特徴について、標準イギリス英語の発音型として知られる容認発音（Received Pronunciation: RP）と比較対照しながら述べる。

3.1.1. 母音の長さ

RP には五つの長母音があるが、マレーシア英語では長母音のないマレーシア語の影響を受けて、それらを短く発音する傾向がある。したがって、/iː/, /ɑː/, /ɔː/, /uː/, /ɜː/ は、マレーシア英語では、それぞれ /i/, /ʌ/, /ɔ/, /u/,

/ə/ と発音される。この特徴は次の例のように、主に語の中位に来る場合に表れる（Baskaran, 2004a）。

field	/fild/	peel	/pil/
half	/hʌf/（又は /haf/）	park	/pʌk/（又は /pak/）
water	/wɔtə/	born	/bɔn/
food	/fud/	move	/muv/
girl	/gəl/	word	/wəd/

これとは逆に、次の例のように短母音が長く発音されることもある（Baskaran, 2004a）。

fish	/fiːʃ/
run	/raːn/
full	/fuːl/
salad	/sæləːd/

3.1.2. 二重母音

次の例のように、RP の二重母音 /eɪ/, /əu/, /ɛə/ がマレーシア英語ではそれぞれ /e/, /o/, /ɛ/ のように発音される場合がある（Baskaran, 2004a）。

mail	/mel/	railway	/relwe/
photo	/foːto/	slow	/sloː/
there	/ðɛ/	hair	/hɛ/

3.1.3. 子音群の単純化

マレーシア英語では、三つの子音からなる子音群の真ん中が削除されることがある。この特徴は特に語末によく表れる（Baskaran, 2004a）。

huntsman	/hʌnsmən/	umbrage	/ʌmridʒ/
glimpse	/glims/	midst	/mids/

二つの子音からなる子音群の場合、/l/ が一つめに来る場合によく削除される（Baskaran, 2004a）。

self	/sef/（又は /sel/）	also	/ɔːsəʊ/
result	/rizʌt/（又は /rizʌl/）	elbow	/ebəʊ/

また、語末の /t/, /d/, /θ/ もよく削除される（Baskaran, 2004a）。

except	/iksep/	stand	/stæn/
digest	/daɪdʒes/	fifth	/fif/

3.1.4. 語末に現れる有声音の無声化

語末に現れる有声音 /v/, /z/, /ð/, /ʒ/ は、マレーシア英語では無声化し、次のように発音される傾向がある（Baskaran, 2004a）。

give	/gif/	move	/muːf/
does	/dʌs/	noise	/nɔis/
with	/wiθ/	bathe	/beiθ/
rouge	/ruːʃ/	beige	/beiʃ/

3.1.5. 歯摩擦音の歯茎閉鎖音化

歯摩擦音の /θ/, /ð/ は、それぞれ歯茎閉鎖音の /t/, /d/ と発音される場合が多い。

thick	/tik/	three	/triː/
method	/metəd/	anthem	/æntəm/
this	/dis/	them	/dem/
father	/fɑːdə/	either	/eidə/

3.1.6. 語強勢のパターン

語強勢のパターンをみると、マレーシア英語（MalE）では下の (a) 群の語のように、第 1 強勢が RP とは異なる音節に置かれることがある。ま

た、(b) 群の語のように、RP では強勢の位置の違いで品詞を区別することがあるが、マレーシア英語ではそのようなことは起こらない。したがって、たとえば、RP では import は動詞の場合と名詞の場合とでは第 1 強勢の位置が異なるが、マレーシア英語では動詞の場合も名詞の場合も同じように発音される。さらに、(c) 群の語のように、RP では第 2 強勢が置かれる音節にも第 1 強勢と同等の強勢が置かれる場合がある（Baskaran, 2004a）。

	RP	MalE
(a)	'exercise	exer'cise
	intel'lectual	'intellectual
(b)	im'port（動詞）	im'port（動詞・名詞）
	'import（名詞）	
	pro'duce（動詞）	'produce（動詞・名詞）
	'produce（名詞）	
(c)	misunder'stand	'misunder'stand
	question'naire	'question'naire
	inter'rupt	'inter'rupt

3.1.7. リズム

マレーシア英語は、RP のように強勢拍リズム（stress-timed rhythm）ではなく、音節拍リズム（syllable-timed rhythm）である。したがって、それぞれの音節は強勢の有無に関係なく同じ長さをもつ（Baskaran, 2004a; 石黒, 1992）。あらたまった様式で話すときには強勢拍リズムを用いる教養のあるマレーシア人でさえ、くだけた様式で話すときには音節拍リズムを用いるといわれている（Baskaran, 2004a）。

3.2. 文法

次にマレーシア英語の文法的な特徴を標準イギリス英語、標準アメリカ

英語等の標準英語（StdE）と比較対照しながらみることにする。

3.2.1. 冠詞の省略

マレーシア英語では、特に抽象名詞の冠詞が省略されることが多いが、これは、抽象名詞の前に修飾語を伴う場合のみ生じる。冠詞の省略は、冠詞を用いないマレー語の影響によるものである（Baskaran, 2004b）。

(1) Did you get mileage-claim for that trip?
(StdE: Did you get a mileage-claim for that trip?)

(2) Main reason for their performance . . . .
(StdE: The main reason for their performance . . . .)

3.2.2. 代名詞の不一致

マレーシア英語の代名詞は、有生名詞の場合は単数・複数の区別があるが、無生名詞の場合は次の例のように、その区別がない（Baskaran, 2004b）。

(3) *Those books* are very informative. *It* can be obtained at Dillon's.
(StdE: Those books are very informative. They can be obtained at Dillon's.)

(4) Rahman bought *three ball-pens* from the Co-op, but forgot and left *it* on the cash desk.
(StdE: Rahman bought three ball-pens at the Co-op, but he forgot and left them on the cash desk.)

3.2.3. 不可算名詞の可算名詞化

不可算名詞が可算名詞として扱われるのもマレーシア英語の特徴である（Baskaran, 2004b; McArthur, 2003; 本名, 2003）。下の例のほかに、furniture, fruit, offspring, stationery なども可算名詞として用いられる（Baskaran, 2004b）。

(5) How many staffs are on medical leave?
(StdE: How many members of staff (staff members) are on medical leave?)

(6) Give me a chalk.
(StdE: Give me a piece of chalk.)

(7) A consideration for others is important.
(StdE: Consideration for others is important.)

3.2.4. 状態動詞の進行相での使用

標準英語では通常、状態動詞は進行相では用いられないが、マレーシア英語では進行相で用いられることがある（Baskaran, 2004b）。

(8) That bottle is containing sulphuric acid.
(StdE: That bottle contains sulphuric acid.)

(9) She is owning two luxury apartments.
(StdE: She owns two luxury apartments.)

3.2.5. WH 疑問文

WH 疑問文で主語と助動詞の倒置が行われないのもマレーシア英語の大きな特徴である（Baskaran, 2004b）。

(10) What we have here?
(StdE: What do we have here?)

(11) Where they are going?
(StdE: Where are they going?)

(12) How they will come home?
(StdE: How will they come home?)

ただし、標準英語とは逆に、WH 疑問文が間接疑問になると主語と助動詞の倒置が行われる（Baskaran, 2004b）。

(13)　I wonder where is she?
(StdE: I wonder where she is.)

また、疑問詞が文末に置かれる場合もある。これは (16) のように、マレー語の影響と考えられる（Baskaran, 2004b）。

(14)　They are going where?
(StdE: Where are they going?)
(15)　She is doing what?
(StdE: What is she doing?)
(16)　マレー語：*Mereka*　*pergi*　*ke mana?*
They　go　where
(‘Where are they going?’)

3.2.6. Yes/No 疑問文

マレーシア英語の Yes/No 疑問文は、標準英語で行われる主語と助動詞の倒置のかわりに、（17）、（18）のように、文末に yes or not? や or not? をつける場合が多い。この特徴も（19）、（20）に示すように、マレー語の影響と考えられる（Baskaran, 2004b）。

(17)　She can sing or not?
She can sing, yes or not?
(StdE: Can she sing?)
(18)　You are hungry, or not?
You are hungry, yes or not?
(StdE: Are you hungry?)
(19)　マレー語：*Dia*　*makan*　*atau*　*tidak?*
He　(eat)　or　not?
(‘Did he eat?’)
(20)　マレー語：*Dia*　*makan*　*ya*　*`tak?*
He　ate　yes　or not?
(‘He ate, didn’t he?’)

このほか、主語と助動詞の倒置も文末の yes or not? や or not? の使用もなく、上昇イントネーションの使用のみで Yes/No 疑問文を表す場合もある。これらは（21）や（22）のように、二者択一疑問によく使用される（Baskaran, 2004b）。

(21) They were fat or thin?
(StdE: Were they fat or thin?)

(22) They eat rice or noodles?
(StdE: Did they eat rice or noodles?)

3.2.7. 付加疑問

マレーシア英語でよく使われる付加疑問に can or not? がある。これには、許可を求める（23）、能力を確認する（24）、相手の意志を尋ねる（25）といった機能がある。

(23) I want to come, can or not?
(StdE: Can I come?)

(24) They must submit the forms tomorrow, can or not?
(StdE: Can they submit the forms tomorrow?)

(25) You carry this for me, can or not?
(StdE: Will you carry this for me?)

標準英語の付加疑問と同じ機能をもつ付加疑問には isn't it? と is it? があるが、これらは標準英語の付加疑問と異なり、先行する節の主語、動詞・助動詞、先行する節が肯定か否定かといったことによって変化しない（Baskaran, 2004b）。

(26) They are coming, isn't it?
(StdE: They are coming, aren't they?)

(27) He can play the piano, is it?
(StdE: He can play the piano, can't he?)

3.3. 語彙

最後にマレーシア英語の語彙の特徴について述べる。

3.3.1. 標準英語と異なる使い方をする動詞

マレーシア英語では、cut, open, close などの動詞が標準英語にはない意味で使用される。たとえば、(28) のcut は‘overtake’(追い越す)、(29) のcut は‘beat’(打ち負かす)、(30) のcut は‘reduce’(値段を下げる) の意味で使われている (Baskaran, 2004b)。また、(31) のopen は‘turn on’(電源を入れる)、(32) のclose は‘turn off’(電源を切る) の意味で用いられている (本名, 2003)。

(28) I tried to *cut* him but he was driving too fast.

(29) Rahman *cut* me by only two marks to become the first boy in class.

(30) The shopkeeper *cut* twenty cents for that breakage when he gave back the change.

(31) Please *open* the light.

(32) Please *close* the TV.

このほか、(33) のone kind は‘weird/peculiar’(変な) の意味で使われている (Baskaran, 2004b; 本名, 2003)。

(33) She is *one kind* really – won't even smile at you although she knows you.

3.3.2. 標準英語と逆の使い方をする動詞

マレーシア英語では、borrow/lend, go/come, take/bring などの動詞が標準英語とは逆の意味で使用される。たとえば、(34) の borrowed は標準英語では lent が使用され、(35) の lend は標準英語では borrow が使用される。同様に (36) の go、(37) の take は標準英語ではそれぞれ

come, bring となる（Baskaran, 2004b）。

(34) She *borrowed* me her camera.
(StdE: She lent me her camera.)

(35) He always likes to *lend* my books.
(StdE: He always likes to borrow my books.)

(36) We'll *go* over to your house to-night.
(StdE: We'll come over to your house tonight.)

(37) I *take* my daughter here every day.
(StdE: I bring my daughter here every day.)

3.3.3. 英語の母語変種にはみられない語

最後に英語の母語変種にはみられない語について述べる。代表的なものにマレー語のmakan（食事）やalamak（ちぇっ、えーっ?）があり、頻繁に用いられる（本名他, 2002; 田嶋, 2002）。

(38) We go *makan*, can or not?

(39) *Alamak!* It's raining. I forgot my umbrella.

おわりに

本稿では、Outer Circle に属するマレーシアの英語について、マレーシア英語の中層語、すなわち Baskaran（2004a）のいう非公式マレーシア英語を中心に、発音、文法、語彙の主な特徴を考察した。今後はマレーシア人作家による英語で書かれた文学作品に焦点を絞り、英語の現地化や非母国語変種による文学的創造性について考察し、マレーシア英語や Outer Circle の英語に対する理解をさらに深めていくことが必要であろう。

注

1) マレーシアの国語は一般的には「マレー語」と呼ばれているが、マレー語は Bahasa Melayu、すなわち「マレー人の言語」となり、多民族多言語国家マレーシアにおいては Bahasa Malaysia（「マレーシアの言語」）、すなわち「マレーシア語」を使用するほうがマレーシアのすべての民族に適応していると田嶋（2002）は述べている。

2) もう一つの考え方は、シンガポールの英語使用状況を「ダイグロッシア」（diglossia）として捉える方法である（詳細は、Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004, 小野 , 2006 参照のこと）。

参考文献

Alsagoff, Lubna, and Ho Chee Lick (1998) The grammar of Singapore English. In Joseph A. Foley, Thiru Kandiah, Bao Zhiming, Anthea F. Gupta, Lubna Alsagoff, Ho Chee Lick, Lionel Wee, Ismail S. Talib, and Wendy Bokhorst-Heng. 1998. *English in New Cultural Contexts: Reflections from Singapore.* Singapore: Oxford University Press. pp. 127-151.

Baskaran, Loga (2004a) Malaysian English: phonology. In Bernd Kortmann, Edgar W. Schneider, Kate Burridge, Rajend Mesthrie, and Clive Upton (Eds.) *A Handbook of Varieties of English: A Multimedia Reference Tool.* Vol. 1. 2004. Berlin: Mouton de Gruyter. 2 vols. pp. 1034-1046.

Baskaran, Loga (2004b) Malaysian English: morphology and syntax. In Bernd Kortmann, Edgar W. Schneider, Kate Burridge, Rajend Mesthrie, and Clive Upton (Eds.) *A Handbook of Varieties of English: A Multimedia Reference Tool.* Vol. 2. 2004. Berlin: Mouton de Gruyter. 2 vols. pp. 1073-1085.

Kachru, Braj B. (1986) *The Alchemy of English: The Spread, Functions, and Models of Non-native Englishes.* Oxford: Pergamon Press. Reprinted, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1990.

Kachru, Braj B. (1992a) Models for non-native Englishes. In Kachru (Ed.) 1992. *The Other Tongue: English across Cultures.* 2nd ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp. 48-74.

Kachru, Braj B. (1992b) Teaching world Englishes. In Kachru (Ed.) 1992. *The Other Tongue: English across Cultures.* 2nd ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp. 355-365.

Kachru, Braj B. (1996) Norms, models, and identities. *The Language Teacher.* [WWW document]. Retrieved: http://www.jalt-publications.org/tlt/files/96/oct/englishes.html

McArthur, Tom (2003) *Oxford Guide to World English.* Oxford: Oxford University Press.

Wee, Lionel (2004) Singapore English: phonology. In Bernd Kortmann, Edgar W. Schneider, Kate Burridge, Rajend Mesthrie, and Clive Upton (Eds.) *A Handbook of Varieties of English: A Multimedia Reference Tool.* Vol. 1. 2004. Berlin: Mouton de Gruyter. 2 vols. pp. 1017-1033.

外務省（2008）「各国・地域情勢―マレーシア」〔WWW 文書〕http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html.

本名信行（2003）『世界の英語を歩く』集英社 .

本名信行（2006）『英語はアジアを結ぶ』玉川大学出版部 .

本名信行 , 田嶋ティナ宏子 , 榎木薗鉄也 , 河原俊昭（編著）（2002）『アジアの英語辞典』三省堂 .

石黒昭博（編）（1992）『世界の英語小事典』研究社 .

小野礼子（2006）「シンガポールの英語（1）―英語重視の二言語政策とシンガポール英語―」『神戸海星女子学院大学研究紀要』第 45 号, 15-30.

田嶋ティナ宏子（2002）「マレーシア―経済発展のカギを握る英語教育」本名信行編著（2002）『事典　アジアの最新英語事情』大修館書店 . pp. 259-273.